

水稻の高温条件下における栽培管理の徹底について(通知)

7月下旬以降の高温と多照により、登熟が平年より進んでいるとともに、登熟期間中の高温により、白未熟粒の発生が懸念されます。

仙台管区气象台から発表された1か月予報によると、令和5年8月末現在で向こう1か月は気温が高いと予報されております。このため、引き続き登熟の向上を図るための適正な水管理を徹底するとともに、刈り遅れによる品質低下を招かぬよう、次の技術対策を参考に栽培管理をくださるようお願いいたします。

(1) 登熟の向上を図る水管理

落水時期が早いと、葉色の低下、葉の枯れ上がり、根の機能減退等により登熟が妨げられ、収量、品質、食味の低下を招くため、早期の落水は避ける。

出穂後 30 日までは間断かん水を実施し、土壤水分を保持しながら稲体の活力を維持し、登熟の向上に努める。

(2) 適期の刈り取りと刈り遅れによる品質低下防止

出穂期後の日平均気温の積算による刈り取り目安は、あきたこまち等の早生種では 950~1,050℃、ひとめぼれ、めんこいな、ゆめおぼこ等の中生~晩生種は 1,050~1,150℃である。本年は平年を大きく上回る高温が続き、積算温度は速いペースで増加していることから、刈取適期は早まることが確実である。

最終的な刈り取り時期の決定は、各ほ場の籾の黄化程度を必ず確認し、黄化程度が 90%に達した時期で判断する。

刈り遅れによる大きな影響は、胴割れ米の発生による品質低下である。あきたこまち等の早生品種では、積算気温 1,100℃を超えると発生割合が増加し、特に本年のような高温年は発生しやすいため、適期刈り取りのほか、収穫後の乾燥・調製においても細心の注意を払う。